

図版解説

病草紙(不眠の女)

京都 河本嘉久蔵氏蔵

本図は名古屋、関戸家の什宝として知られた「病草紙」一巻、十五図のうち第二段にあたる。この絵巻が戦後卷子装を解かれた際に同家を離れ、二三の蒐蔵家の手を経て昭和三十六年頃現所蔵者の許に入った。「病草紙」の残欠としては右十五図のほかにもなお六図が伝存しているが、この一段は中でも題材の特異性と含蓄ある表現とによって注目を惹く。昭和三十八年十一月、当研究所に於いて絵巻物の特別展覧を行なうに際し、特に乞うて陳列に加えることを得、本図は久方ぶりに愛好者や研究家の清鑑に供せられた。その折撮影した写真資料の一部を図版としてかかげ、調査の結果による略解を附することとする。

本断簡の現状は Pl. V に見られるように、詞と絵とを続けて一幅に仕立てた掛幅装で、天地二五・九五cm、横幅は下辺で詞が一四・五cm、絵が二六・七cmとなっている。⁽³⁾

詞書は別紙であるが、顕微鏡写真によると絵の部分との間に紙質の違いは認められない。但し両者の継ぎ目に於ける紙の横皺が連続せず、詞と絵とのものとの関係については一考の余地を残す。詞は六行にわたり、次の説話を記している。

(天和) (葛)
山とのくにかつら木のしものこほりに
(片岡) (4)
かたをかといふところに女ありとり立て
いたむところなけれともよるになれ
(寝入)
ともねいらるゝことなしよますからお

きめてなによりもわひしきことな
りとそいひける

図はまさに、いねがての夜を悩む女の姿であるが、寝所のしつらい服飾など、大和の片田舎にしては立派にすぎ、自ずと都ぶりの現れる絵師の筆を思わせる。部屋の上部をうす青くぼかした霞の効果⁽⁵⁾が、中央に置かれた燈台⁽⁶⁾の小さな赤い火の色とともに、夜の深さを暗示する。正面中央の母屋柱を境に、向って右に障子二枚が引かれ、左手は白壁塗りで、腰に副障子⁽⁷⁾を入れている。障子も副障子も、蘇芳⁽⁸⁾の藻勝見文を一面に散らしているが、この文様は「伴大納言絵巻」 「年中行事絵巻」など、常磐光長とその系統の絵巻に好んで用いられていることは注意を要しよう。⁽⁸⁾ 障子の縁はいずれも群青で縹をあらわし、白い裏文を置いていたことが、剝落のうちにも窺われる。部屋の床は横に板張りとし、左右に寄せて置畳をして、四人の女の臥床をしつらえる。左奥に半身もたげた主人公が、おのずと図の中心をなし、右手の指を折って時刻を数える表情の切なさが看る者に迫る。身には白の小袖をつけ、広袖の衾(夜着)を大きく打ち掛けている。衾は下地を淡く白で暈どり、銀で文様を描き入れて、白綾の地文様を表したらしい。文様は剝落のため明瞭でないが、やはり藻と花文とを組合わせている。両の袖口には裏の白地を示す鉛白の厚塗りがよく残って見える。肉身の白はきわめて薄く、頬にさした淡紅色(鉛白と朱)がほんのりと美しい。従って着衣はもとより、顔や手の線描も、最初の墨描きが決定的なものとして生きており、いわゆる描き起しは、この人物の場合、殆んど認められない。それらは柔いアクセントを持った、流暢な筆さばきで、微妙な身のこなしを写し出す。顔の扱いは鉤形の鼻、一線をなす眼など、この時期の類型によってはいえるが、「源氏物語絵巻」など、いわゆる「つくり絵」系における諸人物の、象徴的意味をもたせた様式化とは、その本質を異にしている。すなわち拡大写真(Pl. VI)で明らかのように、「引き目」とはいつでも瞳のあたりに筆を重ねて憂わしげな眼ざしを巧みにとらえる。朱の両唇の間に濃墨の一線を入

れた口の表現にも変化があり、さらにまた顔の半ばをかくして肩先に乱れ、臥床の上をうねり流れる墨髪の、生き生きした濃墨線の働きが、画面をひきしめ不気味な印象を強めている⁽¹⁰⁾。

このような主要人物の特色は、安らかに眠る三人の女達との対比でさらに強調される。鼻筋の高い横顔をみせた傍らの女は、若い娘らしく、深く被いだ袷の袖や衿元から、花やいだ丹色をのぞかせる。右手の位置には、小肥りの中年の女と、可愛げな少女とが、ひとつ衾のなかに向きあって、静かな夢路をたどる(挿図)。三人三様の寝顔は、細くのぼした眼の線のひき方、口の形の微妙な変化で描きわけられ、しかも相互に調和して、夜のしじまと、独り覚めた女のおせりとを、ありありと感じさせる。

このように穏やかで、しかも姿態や表情を巧みに捕えた線描の特色は、「病草紙」諸段のなかでも、(1)鼻黒の一家や(2)雑に眼をつつかせる女、(3)肥り過ぎの女など、露骨な奇形や苦悶のさまをあまり示さぬ諸段に相通している。それらは、主人公の悩みが深刻なだけ、一沫の皮肉や諧謔を感じさせ、一群のうち最も筆のたつ絵師の手になることを思わせる。軽く要所にだけきかせた彩色の効果、特に着衣にかけた白の量どりや、群青の使い方、僅かな朱色の鮮やかさ

挿図 病草紙(右側に眠る二人の女) 拡大 ×2.15

なども、澄んだ色感を共通に示すといえよう。それはやはり十二世紀における専門絵師たちの技法と様式のなかで理解することが、現在の知識としては最も自然であろう。それは、「伴大納言絵巻」の作者の特色とする、細く鋭い描線の緩急自在な変化に比べると、一そう切れ長の筆をきかせ、しかも表情のある男性の姿にすらなお、ゆったりした一種の趣をたたえる。常磐光長を一つの代表とする十二世紀後半、後白河院時代の絵師のなかでは、穏健でしかも確実な描写力を有する者といえよう。

「病草紙」全体の構成やその性格、さらに「地獄草紙」「餓鬼草紙」の二類と併せてのいわゆる「六道絵」にこれが当るか否かなど、なお今後に俟つべき多くの問題を残している⁽¹¹⁾。ここにはその出発点として、「不眠の女」一段の分析を通じ、その絵画的特色を顧みることを試みた。(秋山光和)

註

(1) 関戸家旧蔵の一卷は、もと名古屋の歌人大館高門の家に伝ったもので、寛政八年(一七九六)、土佐光貞(一七三六)が次の奥書を附している。「廢疾畫一卷、大館高門家藏也。其所圖不成人十六種。予廿五世祖、刑部大輔吉光眞蹟。詞書傳曰卜部兼好所寫也。而今分其中一葉、見贈予、々即模其圖及其逸者一葉、贈之、聊謝之。其畫雖出一時戲、實可謂希世之品。寛政丙辰季冬五日觀之。畫所預從四位下土佐守藤原光貞審定」。絵巻の内容は、(1)鼻黒の一家、(2)不眠の女、(3)風病の男、(4)小舌ある男、(5)尿を吐く男、(6)ふたなり、(7)眼病の治療、(8)歯のゆるぐ男、(9)尻の孔多き男、(10)陰毛に虫ある女、(11)霍乱の女、(12)せむしの乞食法師、(13)口臭ある女、(14)嗜眠癖の男、(15)顔に痣ある女、詞・絵各十五段のほか、土佐光貞による模写二段白子、侏儒が添えられていた。これらは戦後卷子装を解かれて一部は逸出し、台紙貼り箱入り装となって関戸家に残った九段(前記中*印のもの)十面(7のみは詞と絵を別箱として)が昭和二十七年三月、国宝に指定された。

(2) 「病草紙」の残欠としては(10)侏儒、(17)背骨の曲った男の二図が掛幅として関戸家に、また前記の光貞が譲られた(18)白子の図は岸光景から原富太郎に伝えられた。『訂正考古画譜』に狩野常信旧蔵、柏木貨一郎所蔵と記す二図の中、(19)小法師の幻

覚を生ずる男は村上長拳氏現蔵、(20)鶏に目をつつかせる女(詞書なし)は益田家旧蔵で某氏の許にある。また昭和一三年頃世に現われた(肥)肥り過ぎの女は松永記念館に所蔵される(『美術研究』八三号参照)。以上六図のほか、大和文華館には鍼医の治療を描いた残欠一葉があるが、上記諸例とは表現を異にし、考慮を要する。

さらに模本に眼を転ずると、図様の全く別な白描模本で、詞書を含まず、三十二段あるいは三十三段の絵を続けたものが、東京国立博物館はじめ各所に伝えられている。図の出入精粗や順序の相違はあるが、いずれも同系統と思われる、一部分をぬき出し彩色を加えた種類もある。また詞も絵も「病草紙」と似た形で、男女の老醜三態を三段に描いた絵巻が模本で伝っており、東京国立博物館所蔵で元禄五年の土佐家粉本を転写したという一本は、巻頭に「新豊折臂翁」の絵を添える。これと同じ構成のものが藤田美術館所蔵冷泉為恭模本中に見出されることは、『考古画譜』に為恭愛蔵という「三老人の巻」との関係において、特に興味ふかい。

(3) 大正九年大和絵同好会刊行のコロタイプ複製本は、厳密には原本よりやや縮小されており、この段の天地は二五・六cm、横幅は絵二六・〇cm、詞一四・二cmを示している。

(4) 大和国葛下郡。『和名抄』国郡部には「加豆良木乃之毛」と訓ぜられている。片岡はその西北部、現在の王子町の南方一帯の地をいい、式内大社片岡坐神社や片岡馬坂陵(孝霊天皇)がある。片岡の名は早く『日本書紀』推古天皇二十一年十一月条、聖徳太子が飢者に逢った説話にみえており、『万葉集』巻七の歌「片岡のこの向つ峯に稚時かば……」も地名とすればここに当るかと思われる。平安時代に入るると『古今集』秋下に「霧立ちて雁ぞなくなる片岡の朝の原はもみぢしぬらん」と詠まれたのをはじめ、歌枕としてしばしば用いられており、また『堤中納言物語』よしなには「とむ片岡に鑄るなる鐵鍋にもあれ」とあって、鑄物の生産地にも数えられていた。従って大和の地名としては中央の人にも親しまれていた訳である。

(5) この霞の部分は現在淡褐色がやや青味がかってみえるにすぎないが、検微鏡で精査すると各所に群青の粒子の残存が認められ、下辺をやや濃く、柔い青色にぼかしてあったことが分る。

(6) 燈台の形は中尊寺伝存のものと同じく、また「源氏物語絵巻」横笛と東屋(二)の図に描かれた形とも類似し、東屋の場合のように折敷が省略されている。

(7) 現在赤褐色を呈するこの文様は、X線写真では完全に透過しており、有機色素の臘脂で、もとは美しい赤紫色、いわゆる蘇芳の色を示していたと思われる。

(8) 葦勝見は、水中に咲く勝見草の花に藻を配した文様で平安時代に好まれ、「源氏物語絵巻」柏木(二)の左奥の女房の表著にも見られるが、特に「伴大納言絵巻」では上巻々末の藏人頭や中巻の源信の着けた束帯の黒袍に用いられ、「年中行事絵巻」では衣服のほか鳳輦の蓋などにまで数多く描かれ、また「吉備大臣入唐絵巻」「彦火々出見尊絵巻」など、いわゆる光長系の絵巻に用例が多い。一方、鈴木敬三氏が指摘されたように(『初期絵巻物の風俗史的研究』昭和三五年)、十三世紀以降になると「紫式部日記絵巻」や「春日権現験記」にも全く認められず、時代の好尚を端的に反映している。

(9) 小袖の場合は、輪郭や衣襲の線描にそって、鉛白をやや濃く塗っているのがX線写真にあらわれているが、顔や手は(頬の部分を除いて)、ほとんど完全に透過しており、肉色が極めて薄いことを思わせる。

(10) なお福井利吉郎氏(『六道絵巻解説』)はこの女の吐く息の形を問題にされたが、これは脇本楽之軒氏も注意されたように(『画説』)、女の口辺をよぎる画面の傷が袷の袖口に続いた形を見誤られたものと思われる(拡大写真Pl. VI参照)。

(11) 「病草紙」およびいわゆる「六道絵」について、これ迄に発表された論文の主なものを挙げておく。獅崎庵「関戸家所蔵の病草紙画巻」(『国華』三四五号、大正八年二月)、田中一松「地獄草紙・餓鬼草紙・病草紙」(『日本絵巻物集成』九卷、昭和五年)、福井利吉郎『六道絵巻解説』(大和絵同好会、昭和六年)、矢代幸雄「病草紙の新展開その他」(『美術研究』八三号、昭和十一年一月)、脇本十九郎「病草紙(名品小解)」(『画説』二四号、昭和十三年二月)、秋山光和「地獄草紙・餓鬼草紙・病草紙の絵画」(『日本絵巻物全集』六卷、昭和三五年)、福井利吉郎「六道絵」(『ミュージアム』一〇八一—一四号、昭和三五年)